

第5回「関西広域産業ビジョン」改訂委員会 議事要旨

- 1 とき 令和5年 10月30日(月)～11月2日(木) (※)
- 2 ところ 各委員所属場所 または オンライン
- 3 出席者 稲田座長、葛西委員、水野委員、上村委員、小笠委員、
久米委員、中山委員、丸山委員、黒木委員、
広域産業振興局事務局
(※)委員毎に個別開催、下記「4 議事概要」は、委員からの意見を記載

4 議事概要

議事 「関西広域産業ビジョン」の改訂に関する意見交換

- ・ 初見の人が見て分かる内容になっているか。一つ一つの単語を丁寧に表現する必要がある。
- ・ P.4 チャレンジ①～③の違いが分かりにくい。現状をブレイクスルーするために DX は外せないが、現行案ではキーワードに入っていない。資料の構成として、後ページで詳しく説明するにしても、ポンチ絵的な機能を果たす P.4 にポイントとして入れておくべきと考える。
- ・ チャレンジ①について、関西が強みとする分野はライフやグリーンだけでよいのか。また、AとBの違いが不明瞭。どちらも新産業についてのこれまでの延長線上の取組みだと思う。書きぶりについても、例えば、MICEの開催はアイデアというよりも方法論になって浮いている感じがするし、各取組アイデアの質が揃っていないように見える。
- ・ チャレンジ②Aについて、時代が求める新たな価値を創出とあるが、課題解決型はチャレンジ①でも言及されているため重複感が否めない。また、強みの掛け合わせにもDXは不可欠。ポイントとして推し出すのと、説明の節々に細かく入れるのでは見え方が全く異なる。課題解決を謳うには、DXを軸として大きく打ち出す必要があると考える。
- ・ チャレンジ①はニューフロンティアの創出、②は既存のアップデートだと認識できるが、③だけ全体に係る内容になっており質が異なるため、(内容の)カテゴリーが分かりにくい。①②の取組を通じて③で述べる成長の好循環をつく

るといったように、①②③の関係性をしっかり書き込む必要があると考える。

かつてニューフロンティアを求めて旧大陸からアメリカへなぜ人が渡ったのかを考えると、アメリカンドリームという期待感があったことと、失敗しても何度もチャレンジできる環境が整っていたからである。本ビジョンについても、チャレンジ①②によって関西産業の魅力が増し成長への期待が高まる中、失敗にも寛容でチャレンジがしやすい、暮らしやすい関西を作り出すことで、チャレンジ人材が集まってくる環境をつくる、そしてそれが好循環を生み出す、ということが分かりやすく書かれていると理解しやすい。チャレンジ③のヘッドラインにある「競争力強化と魅力向上による成長の好循環」とはどのような状態か、しっかりと文字で示すべきである。

-
- 資料の位置づけをはっきり示したほうがよい。例えば、P.3 めざす将来像・目標についても、誰が目指すものなのか、主語が明確でない。ビジョン改訂に携わる者からすると当たり前の前提でも、初見の方には伝わらないことが多い。毎回言葉で説明できるわけではないので、公開する資料を見ただけで作成者の意図が伝わるように、文章で表現しきることが必要。資料の見たい目(見やすさ)も同様。
 - 各チャレンジについて、具体的に記載されている取組アイデアはイメージがつかいが、リード文は抽象的すぎて分かりにくい。
 - ビジョンは産業界へのメッセージであり、関西をこのようにしていきたいという方向性を示すもの、皆に賛同してほしいものだという意思が、現行の文章からは見えない。その意味でも、ビジョンの位置づけや現状分析等があるほうが分かりやすいし、誰が取り組むのか主体を明確にすべきと考える。現行案では、ビジョンを読んだ後自分も一緒に取り組む必要があるという気持ちにはなりにくい。
 - 各関西チャレンジの違いが分かりにくい。特に、①「強みで貢献」と②「強みを活用」の違いが不明瞭。①はまだ強みになっていない新産業を作り出すことが主眼であるならば、強みで貢献よりも、強みで創出のほうが合致するのではないか。新しいものを作りあげるということを強調したほうがよいと考える。
チャレンジ②は、従来産業に特化していることが明示されるとよい。
チャレンジ③は、現在従来産業に携わっている方が日々試行錯誤をしながら悩んでいる部分だと思う。個々の企業努力では打開できないことを、広域連合

が新たな取組をしていくから共にごんばろうというメッセージを書き込む必要があると考える。現行の書きぶりだと、自分事として捉えにくいのではないか。

- これまでの議論から、人材が産業の成長の基盤という共通認識だと思うが、多数の取組アイデアのうちの一つになることで小さく収まってしまっている。2つの将来像に関わるほど人材を重要と考えているならば、位置づけや表現を工夫すべき。
-

- パブリックコメントは一般の方が読むことを想定して、分かりやすい表現を意識すべき。
 - P.5 について、MICE の開催(レガシー)がライフサイエンス、ヘルスケアにどうつながるのか不明。その分野の会議を開催するという意図であれば、例示を入れるとか、直接的に書いたほうが分かりやすい。また、レガシーの意味するところが分かりにくい。万博の後という意味なのか、万博会場の跡地という意味か。
 - P.7 業界一丸となつての構造転換について、環境負荷低減に向けて脱炭素等に業界全体で取り組んでいくということなのであれば、括弧書きの例示ではなく、直接的に記載したほうがよい。環境負荷低減以外にも内容的に含みたいのであれば、環境負荷低減を例示とすべき。
-

- 地方の各地域をどのようにカバーできるか考えられればよい。
 - 中小企業レベルも含め、リソースの共有等、広域連合の予算内で取組可能かつアピールできること、広域で連携できることがあればよい。
-

- 網羅的な改訂ビジョンに仕上がってきていると思う。関西らしさ(関西の特徴、他地域では適用できない概念)も多く含まれている。
- 関西チャレンジ①～③(貢献・活用・発揮)について、イメージがしにくい。共通認識がもてるよう、内容の明確化が必要かもしれない。

- ・ 関西チャレンジ③について、目指す姿は基盤の強化ということだが、(強みを)発揮していくという概念とのつながりが見えづらい。
- ・ MaaS、MICE、オリジナルスタートアップイベントの開催等、目玉となるイベントも多く含まれているが、具体的に誰が実施していくかも含め、打ち出し方を今後どうするのか考える必要がある。現行案は取組アイデアが様々書かれてあるが、インパクトが弱い。

-
- ・ P.4にピックアップされているキーワード・キーアクションと、その後のチャレンジ①～③のつながりはどうなっているのか。改訂作業の過程でチャレンジを深掘した名残なだけなのか、キーワードやキーアクション等と文言が一致しているわけでもないし、少し浮いている印象を受ける。
 - ・ 関西チャレンジ①～③の打ち出しとして、“売り”となる項目(宇宙、MaaS等)をキーアクション等にも書き出してもいいかもしれない。関西地域全体でのスタートアップ創出や宇宙産業等は他の地域ではやっていない、外部の関心を引き付ける際の打ち出しになるものであり、メリハリをつけられるもの。さらに、産業界としても関西が目指す方向の旗印としてあげられるものである。キープロジェクトが一目で分かるように表現できれば、ビジョンを見た人にとってわかりやすくなると思う。

-
- ・ チャレンジ全体としてボリュームがあり、文章として読むのが大変。各チャレンジのうち、象徴するものにイラストを活用するなど、具体的にイメージができるよう工夫ができるとよい。
 - ・ チャレンジ①ではライフサイエンスやグリーンの例が挙げられているため、それが関西の強みと捉えていることが分かるが、チャレンジ②についても同様に、強みやポテンシャルを、例示でよいので明記したほうが、より分かりやすくなる。
 - ・ デジタル化について、関西が培ってきた歴史や文化・多様な産業を含むデータを整理(または今後取得)し活用することによって、付加価値を上げ、生産性向上に役立てるといった視点があればよい。
例えば、滋賀大に全国で初めてデータサイエンス学部が新設されたように、関西において先導的な動きも出てきていることがPRできるとよい。データの

活用は、製造業にせよサービス業にせよ今後ますます必要になると考える。

- ・ 初見で改訂ビジョンを見る人がどのように感じるのか、分かりやすい内容になっているのか、そのような点を意識してほしい。

-
- ・ パブコメを実施するにあたり、改訂ビジョンの根幹である関西チャレンジ①～③を初見の方に理解してもらう必要がある。例えば、チャレンジ①のめざす姿である「新産業の創出」とチャレンジである「強みの貢献」が、直観的に結び付きにくいように感じる。チャレンジ②も同様に、めざす姿の「産業転換と深化」と「強みの活用」の繋がりが見えにくい。チャレンジの詳細を読まなくても分かるように、各チャレンジのリード文の書きぶりや繋げ方を検討してほしい。
 - ・ 産業ビジョンの中心が製造業になるのは大筋だと理解するが、今後は IT やサービス業を含むソフト系についても、気配りが必要。DX という観点からも避けては通れないと考える。

-
- ・ P.3 トレンドとして記載がある“ESG 投資“については、定義が曖昧ということもあり、アメリカ等では使われなくなりつつある。2040年には言葉としては使われていない可能性がある。
 - ・ 万博開催後は、GRPが落ち込む傾向がある(70年万博参考)。建設等のハード面はチャレンジする予定なので、ソフトレガシーをその後どうしていくかをビジョンに盛り込むとよい。
 - ・ スタートアップは、国の5か年計画も含めさまざまな支援施策もあり、大学発も生まれてきている。今後重要となるのは、経営人材と大企業の変革だと考える。スタートアップは、企業を大きくする際に大企業のサポートが必要になるが、関西はスタートアップに対するオープンイノベーションマインドが東京に比べて乏しいのが課題。製薬や創薬では M&A はポピュラーであるが、ディープテック系はこれからの印象。
 - ・ P.6チャレンジ①Bについて、MaaS と空飛ぶクルマの例だけでは寂しい気もする。特に、万博は「いのち輝く…」をテーマに掲げている。チャレンジ①Aにライフサイエンスやグリーンは入っているので、見せ方の問題かもしれない。また、

地域のポテンシャルを活かしたチャレンジについても、宇宙産業だけしか例がない。核融合は京大や阪大が力を入れており、スタートアップとしてもかなり資金調達ができている。“エネルギー”を含めると、チャレンジに迫力がでるかもしれない。

- ・ P.7チャレンジ②Aの第2創業について、“後継ぎベンチャー”“ベンチャー型事業承継”を記載できないか。特に、後継ぎベンチャーは、大阪発(大阪産業局)の言葉である。
- ・ P.8 チャレンジ②B のデジタル活用について、「生産拡大、安定供給、在庫管理」は DX と書き換えてよいのではないか。細かく書いてしまうことで、意味を狭めてしまうかもしれない。
- ・ P.4 アプローチでピックアップされているキーアクションが、その後のチャレンジ①～③に繋がっているものとそうでないものがある。各チャレンジに(概念として)溶け込んではいるが、キーアクション=カギになる行動なため、少し収まりが悪いようにも見える。

以上